

# 令和2年度青少年「平和と交流」支援事業 ヒロシマ平和行政実務者研修レポート

北海道 旭川市

## 1 研修で学んだこと

今回の研修で、自分自身が原爆や戦争、平和について学ぶことができたのはもちろんのこと、これから平和行政に携わっていくなかで、目指すべきことや、伝えていかなければならないことを確認することができました。

1日目は、資料館や平和記念公園を見学させていただいたり、平和学習講座や体験者のお話を聞かせていただいたりと、実相を学び、自分の中で平和を考えることができ、その大切さを深く感じました。

平和学習講座では、ただ話を聞くだけでなく、所々で質問の時間を設けたり、「リトルボーイ」の実寸の布やウランの模型など目で見て分かる教材を用いて小学生でも飽きずに、興味を持って聞くことができる内容になっていると感じました。私自身も「リトルボーイ」は思ったより小さい印象を受け、この小さい爆弾でたくさんの被害を出したと思うととても恐ろしいと思いました。旭川市でも、長崎へ中学生を派遣する際の事前学習などで、目で見て分かる資料を活用していきたいです。

平和資料館見学では、今まで、教科書や画像でしか見たことがない資料を見ることができ、改めて、戦争の悲惨さを感じました。教科書では黒い雨が降ったことも、お弁当箱が真っ黒になったことも知っていましたが、実物を見ることで、こんなことが本当にあったことなのだ改めて実感する事ができました。やはり、画像や文字で見ると、実際に広島に足を運び、実物を見ることで感じることは多いと思うので、旭川の子どもたちにも一度訪れてほしいと伝えていきたいです。

被爆者体験講座では、戦争はもう二度と行ってはいけないもので、核を世界から無くさなければいけないと強く思いました。実際に原爆を体験した方のお話を聞かせていただくのは今回が初めてでしたが、予想以上に悲惨で、ショッキングな内容で、自分が生きてきたこれまでは、どれだけ平和でありがたいものだったのか考えさせられるきっかけになりました。今後、実際に体験された方からお話を聞くことができなくなってきたり、証言を受け継いでいく人もいなくなってしまうと、また、人々は戦争の恐ろしさや悲惨さを忘れ、同じことをくり返すことになりかねないので、そんなことにならないためにも、体験者のお話を聞くことができている私たちがそれを繋いでいくための行動をしていかなければいけないと思いました。

今後は、平和行政を進めていく中で、原爆や戦争、平和について、自分事として捉え、考えてもらえるよう工夫していくことのほか、市民がより実感を持って考えてもらうために、本市で起こった戦争の歴史も伝えられるよう検討していきたいと思いました。

今回学んだことを活かし、市民が日常生活の中で平和を感じ、考えることができるまちを目指します。

## 2 その他（平和首長会議に期待すること等）

今回は、このような機会を提供していただき本当にありがとうございました。自分自身学ぶことが大変多く、今後平和行政を推進していくモチベーションとなりました。

平和首長会議には、国内のみならず、世界にも加盟国があるので、世界では平和に関するどういった取組が行われているのか学べたり、世界の方々と交流できたりする機会があるとよいと思いました。世界で問題となっている黒人差別問題の運動が昨年、インターネットやSNSを通して行われており、特段その問題に関するSNSをフォローしなくても、自分から調べなくても目に入って来るような状況でした。このように、世界の取り組み方は若い世代も取り込んでいる事例が多い気がするので、そういった技術もどんどん学んで行きたいと思います。

また、各自治体には、平和に興味を持って広島や長崎への派遣事業に参加してくれる子どもたちがいます。次世代の若者が平和を考えるきっかけをつくる者として、そういった子どもたちが活動をできるような場があると良いと思いました。各自治体では協力できることに限りがあり、まして、北海道だと資料や、場も不足しているのが現状なので、そういった子どもたちにも、広島にいる子どもたちと同じような機会があると、より多くの発信することができるのではないかと思います。とはいえ、広島に何度も行くことは難しいと思うので、広島の子どもたちと、各自治体の派遣事業に参加した子どもたちが繋がり情報や学んだことを共有できたり、Y o u T u b e でそれぞれの活動を発信したりできないかと思いました。

# 令和2年度青少年「平和と交流」支援事業 ヒロシマ平和行政実務者研修レポート

栃木県 栃木市

## 1 研修で学んだこと

### 【伝えることの大切さ】

研修の冒頭に小泉事務総長が仰っていた、世界へ、また、次世代への平和文化の浸透を推進するために何ができるのかを考えながら受講した二日間であった。被爆体験証言者の梶本さんの講話の中で、海外で講演を行った時の外国人の方の反応が地位のある方と市井にある方では異なっていたというエピソードは、我々一人ひとりが平和を尊ぶ気持ちを持つことによって、世論を醸成して世界を平和に導く可能性があることを示唆していると感じた。その一端を担うのが平和教育・平和行政であると考え、本市においては未だ不十分であるため、市民へ向けた情報発信を強化していきたい。

### 【展示の見せ方、市民へのアプローチ】

広島平和記念資料館を拝観する中で、展示物の選定や配置の意図について貴重なお話を伺うことができた。中でも、加藤副館長から伺った、被爆の実相の展示について、前半は原爆投下当日の惨状に焦点を当てた内容、後半は個人一人ひとりの生（死）について向き合う内容というコンセプトで配置したことや、入口に大きく掲示された少女の写真が、被爆の実相の展示の最後に、後年の同一人物の写真とともに再掲示されて「熱線」「爆風」「放射線」の原爆被害を見る者の目に強く訴えるよう配置したことは、展示を通して観覧者へいかに働きかけるかを念頭においたものであると感じた。観覧者へより客観的で多くの情報を伝えたいという意図をもった配置をすることについて、これまで意識していなかったため、新たな視点を得ることができた。

規模は全く異なるが、本市においても、毎年「とちぎ平和展」を開催しているところである。絵画、写真などのパネル、遺品等の現物（又は複製）等を展示するにあたり、本研修で得た知見を活かして、見やすい、伝わりやすい展示の在り方を考察・実践したい。

### 【平和を「考える」】

平和行政に携わる上で、「平和とは何か」という問いは避けて通れないものである。永井副所長の講演の質疑の時や、参加自治体間の意見交換でも平和の定義について話題に上り、永井副所長からは明確な定義づけではないが「暴力や抑圧のない状態＝平和」といえるのではないかと、また、戦争⇔平和の対比だけではないとの見解が示された。

世界情勢が時代とともに変化していく中で、平和の在り様を考えていくこと、市民が生活の中で平和について考える素地を作ることが重要であると考え。

## 2 その他（平和首長会議に期待すること等）

### 【研修事業の継続】

- ・本研修に参加させていただいたことで、研修内容が非常に充実していたことや、一緒に参加した他自治体の皆さんの意欲的な姿にとっても刺激を受けた。また、実際に広島を訪れて、広島平和資料館の現物展示や点在する被爆建物を見ることで、私自身、平和行政の取組へのモチベーションが非常に向上した。  
是非、この研修事業を継続していただきたいと思う。

### 【DVD 作成】

- ・被爆体験講話を行っている被爆者の方が、現在は36名とのことであった。被爆者の方の年齢が上がるにつれて、貴重なお話を直接伺う機会はますます減っていくため、被爆者の方の講話を収めたDVDの作成を希望する。

### 【リモート講演】

- ・被爆体験講話及び被爆体験伝承講話、平和学習講座の利用について、リモートでの講演を希望する。  
コロナ禍により、今後も当面の間、大人数での集会は制限される可能性がある。また、直接お会いして対面でお話を伺う方が、より被爆の実相が伝わると思うが、移動による講師の方の負担を減らすとともに、コロナウイルス感染のリスクを軽減できると考える。

# 令和2年度青少年「平和と交流」支援事業 ヒロシマ平和行政実務者研修レポート

東京都 国立市

## 1 研修で学んだこと

### ●被爆の実相について

今回の研修を通じて、被爆の実相を知ることの意義を深く認識した。これまでくにたち原爆・東京大空襲体験伝承者講話等の業務で知りえた知識もあったが、より広い視点で原爆の恐ろしさと人々の苦悩を思い知ることができたと感じている。

例えば、上空 600 メートルでの炸裂が原爆の威力を最大限に発揮できる高さだったこと、たった約 1 キログラムのウランの核分裂が引き起こしたエネルギーだったこと、放射線による染色体の切断と修復が組織の奇形を生み出すこと、広島県産業奨励館（現原爆ドーム）のほぼ真上に落とされたために部材が垂直に落下して現在の骨組みが露わになったことなど、科学的なデータとともに原爆の恐ろしさを知ることができた。また、広島が投下候補地になったのは日清戦争以来の軍都で陸軍の司令部があったこと、現在の平和記念公園にあった中島地区は店舗や住宅がひしめき、市内で最もにぎわっていたエリアであったこと、それらが熱線と爆風により一瞬で破壊されてしまい、生き残った市民もその後放射線の被害に苦しめられたことを知った。

以上のような情報は、1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分を起点に、過去・現在・未来を連続的に捉え、状況を想像するのに役立つと感じた。

### ●被爆者の体験やエピソードを通して

今回の研修で最も有意義だったことは、原爆体験や広島歴史に紐づけられた個人のお話をうかがえたことである。とりわけ、被爆体験証言者の梶本淑子さんの講話に心を揺さぶられた。原爆投下直後の惨状に加え、戦後生き延びるのに苦労されたお話や、後年お孫さんの強い働きかけで講話をすることになり、今では国内外で交流を続けておられることをうかがった。また、平和記念公園を案内してくださったピースボランティアの方は、自身が被爆二世であることを近年知ったことから活動を始められたとのことだった。長年被爆体験を語らなかつたご家族のことや、被爆孤児、外国人被爆者などの存在を伝えてくださった。広島平和記念資料館の展示も、亡くなられた方々の具体的な人となりが見える展示手法になっており、残された家族の悲しみが立ち上がってくるエピソードに満ちていた。被爆者の体験やエピソードを知ること、国家間における戦争の愚かさだけでなく、戦中戦後にかけて人々を苦しめた具体的な差別構造にも気づかされた。

### ●「復興」や「歴史」を多角的に捉えること

広島市立大学の永井均先生の講義では、広島のみならず「軍都」から「平和都市」への転換を

図った背景には、平和都市法をはじめとする法整備を経て、国を挙げての復興支援があったことがわかった。そして、広島は世界中が注目する「復興」を遂げた一方で、旧中島地区では強制的な転居が実施され、原爆ドームの保存を巡っては市民の間で意見が分かれていたことを知った。

永井先生の、何をもって「復興」なのか、という問いは、東日本大震災やコロナ禍を経験した現代の私たちにも重い課題を突きつけていると言える。そして、ひと口に歴史といっても、教科書で学ぶ国家としての「大きな歴史」のみならず、個人の物語や原爆投下側である米国等他国からの視点をバランスよく捉えていく姿勢が大事だと感じた。

## 2 その他（平和首長会議に期待すること等）

### ●平和行政に取り組む自治体の交流の場

今後も引き続き、平和行政実務者研修を開催し、多くの自治体の平和行政担当者が交流できる機会を設けてほしい。今回の研修では、各自治体の状況や課題が違っていながらも、広島市が掲げる「世界恒久平和の実現」というスローガンを共有し、よりよい事業展開のために頑張っている担当者ばかりだったことに私自身が励まされた。平和行政は理念だけではなく予算の確保から事業の質まで問われるため、どの自治体のお話も共感できる内容だった。他の自治体の取り組みを知ることや、課題を共有することは、事業のあり方を振り返るよいきっかけになった。

# 令和2年度青少年「平和と交流」支援事業 ヒロシマ平和行政実務者研修レポート

東京都 多摩市

## 1 研修で学んだこと

本研修に参加するに当たり、広島における平和行政を学ぶという目的だけでなく、原爆による被災という背景を持たない自治体の職員である参加者が限られた予算、資源の中で、被爆の実相や、戦争体験の継承に取り組み、戦争の恐ろしさや平和の尊さを伝えるという問題に市民をどのように巻き込んでいくかということをそれぞれ真剣に考えている姿に感銘を受け、多くのことを考えさせられた。2日間という短い期間ではあったが、平和記念資料館の見学やフィールドワーク、被爆体験講話、学習講座をはじめとして、自治体職員同士の意見交換や発表会などの充実したプログラムだった。

私は入庁、平和啓発事業を担当して2年になるが、本研修に参加するまでは、原爆や核兵器の恐ろしさについて、「イメージ」として認識していた。しかし、被爆体験者の思いのこもった講話や講師の方々の工夫された説明、ボランティアガイドの案内などから原爆の実相について「具体性」に変化した2日間だった。心情が「具体性」に変化したことは事業を企画をする上で重要なものであり、これから創意工夫を凝らしながら、柔軟的に業務を進めていきたいと考えている。広島に実際に足を運んで、目で見て、肌で感じることには大きな意義があり、この経験を自分の中に留めるだけでなく、共有を図り、これからの本市の平和啓発事業に活かしたい。

特に他自治体とのグループディスカッションでは、問題意識の共有や今後の取り組みについて考える大変貴重な時間となった。どこの自治体も、「組織として平和事業に取り組むことができていない」「参加者は高齢者が多く、固定化している」「各市民団体の主義主張をまとめることが難しい」「財政状況が厳しく、現予算で創意工夫を求められている」など共通の課題認識があり、共有することができた。そして、このような課題の中でより効果的な取り組みを実現できるように話し合うことができた。その中でも改めて自分の住むまちの戦時中の歴史などを見つめ直すことの大切さを感じた。

この2日間の研修で得た多くのヒントを参考にしながら、市民一人ひとりが平和について自ら考え、実感し、発信してもらうことができるように、これからの本市の平和啓発事業を担っていきたいと考えている。

## 2 その他（平和首長会議に期待すること等）

核兵器廃絶に向けて引き続き連携を図り、平和啓発事業を協力をして進めていきたいと考えている。今後も本研修のような原爆の実相を知り、他自治体の職員と情報共有、交流を図ることができるような場があれば参加してみたい。

# 令和2年度青少年「平和と交流」支援事業 ヒロシマ平和行政実務者研修レポート

神奈川県 横浜市

## 1 研修で学んだこと

平和学習講座によって、ヒロシマで起きたことから核兵器の仕組みや恐ろしさなど、ヒロシマで起きた出来事を、一から学びなおすことができました。

再度、学習できることは平和行政を担当するものとして貴重なことですし、講座を通じて、自身が今後、どう平和と向き合っていけるのか考える機会となりました。

また、被爆体験講座では、当時の状況や投下直後の様子を聞き、心が締め付けられる思いでした。資料や文章だけでは分からない事を、話を通じて想像しながら聞けることは、肌で感じる事ができる貴重な経験であり、被爆経験を語れる人がいなくなってしまうことは絶対に避けないといけないことだと感じました。

## 2 その他（平和首長会議に期待すること等）

被爆の実相について、自分の中で理解できていないままでしたので、研修を通じて理解し、考える機会を提供して下さりありがとうございました。

平和行政は、あまり他自治体に電話して聞くことが少なく、繋がりが少ないと感じていましたので、意見交換やグループワークを経て、交流を深めることができ、充実した研修となりました。

来年度以降も、ぜひ、この研修を実施していただき、平和行政の実務者の知識を深める機会があると、嬉しいなと思います。

また、平和首長会議で行っている事業を積極的に活用し、連携して核廃絶の取組を推進していきたいなと思います。

# 令和2年度青少年「平和と交流」支援事業 ヒロシマ平和行政実務者研修レポート

神奈川県 寒川町

## 1 研修で学んだこと

### ◎戦争の歴史や平和について

現在の平和記念公園のフィールドワークではあまり聞きなじみのないところを見学することが出来ました。新たな知識を深めることでより深く原爆について知ることが出来ました。ピースボランティアの方の話も分かりやすく、実際にここで原爆の被害があったことが体験的に学ぶことが出来ました。

原爆の歴史について、現地に行ってみて初めて知ることが多かったです。また、原子爆弾が落とされた被害についてだけでなく歴史的な背景を詳しく知ることもできました。原子爆弾投下について多面的な見方をすることの重要性と今日でも議論が展開されていることを改めて認識しました。しかしながら現在においても、原爆の被害にある方々がいらっしゃることが心苦しかったです。原爆は過去のことではなく現在の問題でもあると痛感しました。

### ◎広島市・参加自治体の取組、交流会

自治体によって様々な取り組みがあり、それぞれの取組から自治体の規模にあった平和行政を試みようと思いました。特に戦争や歴史とかかわりが深いところでは、大々的に事業等を行っているという印象を受けました。寒川町でも、平和への大切さや尊さを町民に伝えていくために、行政として働きかけるようにいかしていきたいと思います。

### ◎平和の大切さをどう伝えていくか

伝承者の育成、朗読会などから戦争を経験していない世代への継承が始まっていることを感じました。宇佐川さんがおっしゃっていた残すことは人の意志だからという言葉がとても印象的でした。私自身は戦争を経験していない世代で、何かを残すということは難しいかもしれないけれど、残されたものを伝えていくことはできることはないか、それを町民にどう伝えていくか今後も考えていくヒントをいただきました。

## 2 その他（平和首長会議に期待すること等）

この度は貴重な研修会に参加させていただきありがとうございました。

平和行政実務者としての立場と一人の人間としてこうした歴史や現在の問題にどう向き合っていくのか考える機会となった2日間でした。

今後期待する事としましては、平和意識の啓発ということで平和首長会議のニュースの配布や平和行政実務者研修を継続し、参加していない自治体にもお知らせをしていただけると嬉しいです。また、今後も貴団体と継続して平和事業の相談やアドバイス等を通じてご教示いただけますと幸いです。

# 令和2年度青少年「平和と交流」支援事業 ヒロシマ平和行政実務者研修レポート

静岡県 富士宮市

## 1 研修で学んだこと

広島平和記念資料館本館は、北側の壁面が一面、ガラス張りになっている。目の前には平和記念公園が広がり、川を挟んで立つ原爆ドームも、実際の距離よりも近く見える。ここはかつて中島地区と呼ばれ、広島城の城下町であり、また、西国街道の宿場町として大いに栄えた繁華街だったと記録されている。約4,400人が生活していたという中島地区は、1945年8月6日の原爆投下によって文字通り消滅した。

原爆が爆発した瞬間、上空600mに半径200mの火球が現れたというのが、それが如何に巨大なものだったのか、今となっては想像することしかできない。

上記は3月18日、19日両日で開催されたヒロシマ平和行政実務者研修の中で、広島平和記念資料館の見学と平和記念公園の散策をした際に感じたことだが、それは原爆の記憶を伝承した方の言葉とともに受け止めることができたからだと思う。

この研修で私は、今に残されている原爆の記憶を知り、それを次代に継承していく難しさと、広島市を含めた他自治体が抱く危機感を学んだ。

研修の中で最も印象に残ったのは、原爆が投下された場において、そのときの経験を今に伝えられている梶本淑子さんの言葉だった。爆発を受けて崩れた建物から這い出す様子、けが人と死体で埋め尽くされた公園に友人を担架に乗せて運んでいく様子などを、その時代を生きていた方だからこそできる臨場感を以て伝えてくださった。

被爆の体験を話すことは、聴く者に被爆への強い恐れを与え、平和への思いを一層強くさせるものであると思うが、被爆体験者の高齢化に伴い、被爆体験の記憶を次代へ繋ぐことが課題となっている。梶本さんは今年90歳になられ、被爆体験講話の講師をされる方の平均年齢も85歳を超えており、被爆体験を伝える機会は減少する一方である。他自治体においても同様に、戦争を実体験として話せる方が減っている中、どのように残すのか、どうやって繋ぐのかに大いに関心が寄せられていると、研修の中で学んだ。

広島市をはじめ先進的な自治体では、被爆体験者と高校生美術部員が協力して絵画を作成したり、被爆体験を聞き取って伝承として語り継いでいく方を養成したり、被爆体験を語っている様子を映像にして残すなど、様々な方法で被爆した体験を残そうとする動きが取られている。それぞれの記憶の継承が、たとえ被爆体験者の証言に劣るとしても、複数の継承を組み合わせることで、亡くなった方の記憶を伝えていくことができるかもしれない。

広島市立大学、永井教授は「被曝と復興 何をどう伝えるか」をテーマにした講演の結びに、「継承方法に正解はない。写真、映像、音声、絵画などの多様な素材と切り口を用いて、再考、再検討を重ね繰り返しアップデートしていくことが大事」と説明した。如何に多くの記憶を受け継いで、次代へ繋ぐことができるのか。平和行政は急務を課されている。

## 2 その他（平和首長会議に期待すること等）

平和行政に係る事業の多くは、新型コロナウイルス感染症の拡大によって大きく停滞した。当市は今年度、広島市への派遣事業を中止せざるを得ず、同様の事例は他自治体でも見られ、他県へ出るのをためらうような動きは、来年度も続くことが予想される。

そこで、平和首長会議には、平和について学ぶ手段の多様化に対応していただくことを期待する。

具体的には、Web会議システムを活用した平和学習講座の実施、及び被爆体験講話、被爆体験伝承講話を音声媒体等に録音、貸与の2点を挙げる。

まず、Web会議システムを活用した平和学習講座の実施について、平和学習講座は、小、中、高校生まで対応して原爆被害の実相が説明されており、平和について学ぶ第一歩として非常に有意義であると考えます。そこで、広島市への派遣事業を実施している自治体が派遣前の事前学習として活用したり、感染防止対策を取りながら学習したりするための方法として、Web会議システムを利用した平和学習講座の実施を提案する。

コロナ禍に対応するため、現在、多くの基礎自治体が急速にWeb会議システムを導入、対応できる環境を整え始めているため、自治体の実施する平和事業の一環として取り入れやすく、Web会議システムを利用することで、双方のコミュニケーションが可能になり、聴講者が講師に対して質疑を投げかけられることから、対面しての講座と同等の学習効果があると考えられる。

次に、被爆体験講話、被爆体験伝承講話を音声媒体等に録音、貸与については、被爆体験者の講話を残し、次代へと繋げていくことの一環であると考えます。被爆体験の証言者、及び被爆体験の伝承者による講話は、広島市内の施設、学校等で聴講することができるものの、市中の感染状況や、講話をされる方の体調等の要因によって、実施が困難となることが考えられる。また、コロナ禍で広島市まで行って学ぶ機会を失った者にとっては、貴重な講話を伺う機会を喪失することになる。そこで、被爆体験講話及び被爆体験伝承講話を音声メディアに記録し、平和学習を行う自治体、学校等の申請を受けて貸与することを提案する。

音声メディアでの貸与は、借用した自治体、学校が再生するために要する機材が少ないことから利用が容易である点と、音声のみで語られることで、より被爆の様子を想起させる効果があると期待する。

これから数年間、コロナ禍によって県をまたぐ移動が阻害される社会において、平和学習の推進を図るため、以上2点を平和首長会議に期待する。

# 令和2年度青少年「平和と交流」支援事業 ヒロシマ平和行政実務者研修レポート

京都府 綾部市

## 1 研修で学んだこと

平和記念資料館や爆心地を訪れ、被爆者の体験講話等を直接聞くことで、これまで歴史でしかなかった「原爆」がこの場所に投下され、人や街が焼かれたのだという事実が、現実の自分と繋がりました。

核兵器を止めようとしている国がある一方で、増やそうとしている国がある。原爆の被害がまたいつ起きるかわからない。「忘れられたら繰り返される」という言葉が印象的でした。

また、松井市長から「平和を願う市民意識は、誰もが納得できる共通の施策であり、それを醸成することが基礎自治体の重要なことである」とご講話をいただき、市としてまず実施しなければならないことを再認識した。

ほか、世界で起きている核兵器の動向などについて、独自ルートで裏どりをされておられることなど、組織体制についても非常に勉強になりました。

## 2 その他（平和首長会議に期待すること等）

現在の取り組みを継続していただければと思います。平和事業の展開について、引き続きご教示をよろしくおねがいします。

# 令和2年度青少年「平和と交流」支援事業 ヒロシマ平和行政実務者研修レポート

大阪府 豊中市

## 1 研修で学んだこと

被爆体験講話でご講演いただいた被爆者である梶本さんをはじめ、広島市で平和に関する取り組みを行っておられる皆さんのお話をお聴きすることで、改めて被爆の実相を知り、核兵器の恐ろしさを感じ、二度と使用されることがあってはならないとの思いを新たにすることができました。被爆の被害だけではなく、歴史的な背景やその後の復興、世界からどう見られているかなど、さまざまな視点をもって被爆や平和について考えることの大切さや、未曾有の被害に遭いながら復興してきた人びとの強さだけではなく、その影には乗り越えられずに絶望してきた人もいたこと、今もなお苦しむ人は多数おり、核の問題はまぎれもなく現在の問題であることなど、さまざまな学びがありました。

研修の中でたびたび取り上げられた「平和」とは何か、どのような状態をもって「平和」といえるのかについて考えることができたことは、とても大きな学びでした。広島市の平和の定義や国立市の条例前文に示された平和の定義は、平和行政に取り組むうえで大切にしたい視点だと感じました。松井市長からお話いただいた平和の状態をつくりあげることが基礎自治体の最高目標、平和を追求するための核心部分は職員の共通資質である、蟻の目と鳥の目を持って業務を遂行することは、今後の業務の礎になるものでした。また、市民が日常生活の中で平和を感じ、守っていくことの延長線上に平和な世界や核廃絶があり、市はそのような取り組みを後押ししていくものだとのお話は、平和行政はどうあるべきかとの迷いを打ち消してもらえるものでした。

平和記念資料館の見学では、前日に加藤副館長にご案内いただけたことが大きな学びにつながりました。展示で何を伝えたいか展示のコンセプトをしっかりと考えられていること、展示物の持ち主や寄贈者一人ひとりのエピソードを大切にされていること、実物展示にこだわり、客観性をもった展示をされていること、来館される当事者とのコミュニケーションを大切にされていることなど、規模は全く異なりますが、常設の平和展示室を開設したばかりの当市にとっては参考になることばかりでした。リニューアル後の展示は、以前と比べて一つひとつの展示がとても見やすくなった印象で、資料館のあゆみの企画展をされていたこともあり、時代に合わせて展示のあり方を見直していくことの必要性も感じることができました。

小泉理事長からお話のあった核兵器は人類がつくり出したものであり、人間がこれを廃絶できないわけがない、核廃絶は必ずできると信じているとの思いに共感し、核抑止論からの解放に向けた大きな流れを形成していけるように、市民の皆さんが日常の中で平和を尊び、平和の大切さについて考えてもらえる機会を継続して提供できるよう、この研修で学んだことを今後の業務に活かしていきます。

## 2 その他（平和首長会議に期待すること等）

今年度は、コロナ禍にも関わらずこのような貴重な学びの機会を提供いただき、ありがとうございました。

今回の研修で、日常生活の中で平和を感じ、尊ぶことの大切さ、そのことが核廃絶をはじめとした平和な世界を願う大きな流れを生み出していくことにつながっていくのだと感じることができました。一自治体として取り組めることには限りがありますが、絶やすことなく地道に平和の取組みを続けていくことで、市民の安心安全で平和な生活を守り、平和な世界を築くことに貢献していきたいと思えます。

市単独で世界情勢や他市町村の取組み状況などを掴むことは難しく、平和首長会議から情報提供していただけることはとてもありがたいことです。また、今回のような研修を受講できることは、担当職員にとって大きな財産となり、今後も継続して実施していただきたいと考えます。市の中だけでは行き詰まってしまうことも、他市町村とともに学び考えることで活路を見出し、今後の連携にもつながっていくと考えます。

一足飛びには進まない地道な取組みの中で、大きな方向性を示していただき、各市の取組みを後押ししていただけることを今後も期待します。

# 令和2年度青少年「平和と交流」支援事業 ヒロシマ平和行政実務者研修レポート

兵庫県 姫路市

## 1 研修で学んだこと

### ・原爆被害の実相

講義により原爆の威力、被害の悲惨さを学んだ後、被爆体験者の講話や資料館に展示してあった一人一人の遺品等から、個々の具体的な原爆被害の実相を学んだ。

### ・歴史

原爆投下に至った歴史的背景、世界の情勢や、旧日本軍が他国に行ったことなど史実に関する講義を受講。

原爆投下だけを切り取るのではなく、そこに至った経緯を史実から学んだ。

### ・平和について

そもそも平和とは何かについて考える。戦争の結果の悲惨さを経験したからこそ、平和の尊さを切に願う。

平和を実現するためには多数の方法・考え方がある中、どう実現していくか。平和は誰もが願うものであるが、行政としてどのように取り組んでいくかが課題である。

### ・核兵器廃絶の重要性

核兵器を使用することがあってはいけない。二度と戦争を起こしてはいけない。

しかし現在、地球上には約 14,000 個もの核兵器が存在しているという事実がある。核兵器を廃絶するための色々な考え方がある中、被爆者として各国の上層部に核兵器廃絶を訴えても、それぞれしがらみもあり、動けない、動かないのが現状だ。市民レベルの活動を地道に行っていく。

### ・戦争・原爆・平和についていかに伝えていくか

戦争を知らない世代が増えていること。戦争体験者・原爆被害者から直接話を聞けるタイムリミットが迫っていること。継承者の育成等の課題が山積している。

広島市は昔から平和教育に力を入れているのが伝わってきた。市民に平和への願いが根付いており、特に中高生の部活動に似た放課後活動であるピースクラブの活動等、他自治体では見られない若い世代の平和への取り組みに驚かされた。

### ・実際に足を運んでみて肌で感じたこと

平和記念公園が伝えているもの。記念碑等を含めて一つ一つに意味があり、それぞれに沢山の人の思いが寄せられている。

当時の被害を伝えるものの保存。現在の綺麗な建物と当時の悲惨な状況を伝える建物が共存していることで、改めて今日の平和について再考させられた。

## 2 その他（平和首長会議に期待すること等）

- ・ 本研修の今後の継続

戦争・平和について考える機会や学ぶ方法はそれぞれの自治体でもあると思うが、特に広島平和資料館や平和記念公園に実際に足を運び、肌で感じて学ぶことは理解が何倍にも膨らむ。平和・戦争についての資料を何冊も読むことよりも、体感することにより得られるものは大きい。また他市町の取り組みや、それを実現するための課題等の意見交換ができたことは大いに参考となった。引き続き、原爆被害の実相、平和の尊さを次世代に伝えていくため本研修の継続を期待したい。

# 令和2年度青少年「平和と交流」支援事業 ヒロシマ平和行政実務者研修レポート

兵庫県 加西市

## 1 研修で学んだこと

私は、これまでに戦争や被爆の実相について学ぶ機会は何度かありましたが、今回の平和記念資料館見学ほど感情が大きく揺れたことはありません。私自身の立場や年連、生活環境、姿勢の変化に加えて、リニューアルされた現在の広島平和記念資料館の展示方法に因るものが大きかったと思います。個人に焦点を当てた展示方法やその個人の背景を詳しく解説していただいたことで感情移入がしやすかったのだと思います。それでも、一瞬にして家族を失った人たちの絶望感は想像では及ばないものだろうと思うと、呼吸をすることが苦しくなるほど胸が締め付けられました。

私は、人が影響を受ける時、そこには感情が大きく動くと思っていますが、平和記念資料館見学はまさにその体験でした。

また、被爆体験講話も大変印象に残りました。戦争体験者の話を直接聞ける機会も年々減少しています。文字や絵では決して伝わらない五感を刺激されるような継承は、他にはないものであり、戦争を直接知らない私たちがさらに後世に伝えるためにできる事を考えることが喫緊の課題だと思いました。

## 2 その他（平和首長会議に期待すること等）

平和首長会議には今後も世界への発信と同時に、今回のように平和行政に関わる職員向け研修を是非継続していただきたいと思います。各自治体で整備する平和学習の仕掛けは大変重要な役割があります。担当職員の視野が広がるだけでなく、同じ平和への取り組みを推進している自治体職員間の交流やネットワーク構築は、相互の情報や経験を共有することに繋がり、相乗効果が期待できます。自治体間との連携を生むことができる貴重な機会だと思います。

最後になりましたが、この度は貴重な機会をいただきありがとうございます。コロナ禍で調整や判断が難しかったと存じますが、開催していただいたこと心より感謝申し上げます。

# 令和2年度青少年「平和と交流」支援事業 ヒロシマ平和行政実務者研修レポート

長崎県 長崎市

## 1 研修で学んだこと

### ○ 平和学習講座

広島原爆に関する基本情報、現在の平和の取組みなど。

特に折鶴の展示方法、卒業証書としての活用方法などは、長崎市も見習う必要がある。平和の象徴のひとつである折鶴が日常生活の中に入り込むことにより、市全体が「平和」をより身近に感じられる。

### ○ 平和記念資料館見学

被爆資料、被爆者の証言などを展示している。客観的な被害の状況を語るコーナーと個人に焦点を当てるコーナーの2種類。特に「人」の取り上げ方は、長崎との大きな違いで、原爆を歴史上の出来事ではなく、自分たちにも起こりうる身近な問題として捉えてもらううえで、欠くことができない視点である。

また、照明や各エリアの広さ、展示の流れなどの部分で、ただ被爆の実相を伝えるだけでなく、原爆と真剣に向き合ってもらえるような空間をつくるための工夫が感じられた。

### ○ 被爆体験講話

被爆直後の凄惨な光景や、その時に受けた心の傷、戦後の苦悩などが生々しく語られた。

特に印象に残っているのが、海外での講話活動を踏まえた、「核廃絶は下からの盛り上がりが必要」という言葉。核兵器廃絶の世論を形成するためには、様々な手法を用いて、こうした生の声を聞く機会を増やす、または残さなければならない。

### ○ フィールドワーク

原爆ドーム、原爆の子の像、レストハウスの他、各慰霊碑を見学。

### ○ 特別講演「被爆と復興—何をどう伝えるか？」

広島の復興の歴史と、「復興」という言葉からこぼれ落ちる事象＝被爆者の苦悩など。

原爆を過去にあった悲惨な出来事で終わらせるのではなく、前後の文脈と絡めて、なぜ原爆が落とされたのか、なぜ戦争が起こったのか、どうすれば平和が実現するのかという視点を育てることが重要。

### ○ 平和推進プログラムと各種貸出資料紹介

- ・ 広島市基本構想

## 国際平和文化都市

「平和」：世界中の核兵器が廃絶され、戦争がない状態の下、都市に住む人々が良好な環境で尊厳が保たれながら人間らしい生活を送っている状態。

「国際文化都市」の具現化のための三つの要素

- ・ 世界に輝く平和のまち
- ・ 国際的に開かれた活力あるまち
- ・ 文化が息づき豊かな人間性を育むまち

平和という漠然とした言葉に対する定義づけがされており、そこから目標が設定され、それを達成するために必要な事業が展開されている。

### ・人材育成

伝承者の育成、平和学習講座の開催。中高生の部活動的な取り組みとして中高生ピースクラブを実施。特に中高生ピースクラブは、学校の3年間で完結せず、卒業後も横のつながりを広げながら、活動を続けられる点が強み。

また、原爆の絵のような、被爆者と高校生の交流も、被爆体験の継承と次世代の平和活動の担い手の育成の両面で大変効果がある取り組みだった。

### ・被爆体験講話

講師の調整から資料館内の会場の手配まで、申請のルートが一本化されている点が、利用者に親切。被爆体験を継承するためのソフトを充実させることは当然だが、利用のしやすさも重要。長崎では市・指定管理者、外郭団体と、利用者の申請先が分岐しており、利用者に煩わしさを感じさせてしまっているため、

## ○参加自治体の取組発表

### 兵庫県姫路市

「姫路市空襲の説明と被害内容」を作成。さらに、戦後の日本の流れに自治体のトピックを絡めた学習教材・パンフレットを配布する。

### 神奈川県横浜市

都市間連携や国際協力を通じた世界の平和と繁栄への貢献を目標とする。講演会、リーフレット作成、動画作成、イベントの後援などを実施。

学校との連携のほか、取組みをいかにして浸透させるかが課題。実施主体と参加者の双方の目線で考えられる人材が必要である。

## ○各自治体の平和の取組を活性するための意見交換

- ・ 平和の定義とは → 核兵器がない、戦争がないことは大前提  
最終的には貧困・差別、人権の問題に繋がる
- ・ 平和学習教材の情報交換

○平和推進事業の素案作成（栃木市、国立市、寒川町、長崎市）

	現状と課題	改善案・やってみたいこと
組織	<ul style="list-style-type: none"> <li>・組織として取組めていない</li> <li>・「平和」への職員の意識に温度差</li> <li>・平和事業の財源少ない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・職員向けの研修 (部局ごとの平和へのかかわり方)</li> <li>・職員向けの情報発信 (庁内掲示板を活用)</li> <li>・まずは足元から意識改革を</li> </ul>
ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自治体間の連携が弱い</li> <li>・民間団体との中立な立場での協働が難しい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・近隣自治体と平和部会をつくる (寒川町)</li> <li>・個人・団体を問わず平和学習の場を設ける</li> <li>・他自治体や大学と資料の貸し借り相互利用</li> </ul>
人材育成・発信	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新たな担い手の育成(発信側も受信側も)</li> <li>・発信の手段</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中高生の学校の枠を超えたクラブ活動</li> <li>・子育て世代への働きかけ (親から子へ伝えたいような内容)</li> <li>・芸術の分野からの平和発信で新しい層に働きかける (市民団体のミュージカルなど)</li> <li>・SNSの活用</li> </ul>

## 2 その他（平和首長会議に期待すること等）

数々の被災資料や当時を生き残った人々の証言などを通して、広島の実相に触れることで、平和行政に携わる者としての初心に立ち返ることができた。国内外に核兵器廃絶と世界恒久平和の願いを発信するうえで、まずは、自分自身が原爆の記憶を風化させないこと、そして「核兵器はあってはならない」という信念を持つ必要がある。知識の習得はもちろんだが、自分の中で平和行政への向き合い方を再確認できたことが、今回の研修における最大の収穫であると考えている。

個々のカリキュラムでは、やはり広島平和記念資料館の展示と被爆体験講話が強く印象に残った。特に個人の人生に焦点を当てた展示には、見た者に原爆を自分事として捉えさせるインパクトがあった。また、展示の手法については専門外であるが、来場者が展示に没入し、原爆に真剣に向き合えるような空間がつけられていた。これは、例えば幼稚園児や小学生などの低年齢層に向けて戦争・原爆を伝えるうえでも、大変参考になると感じた。

2日目には、広島市の具体的な取り組みや、他の自治体との意見交換を通じて、視野を広げることができた。現在、平和を発信する側においても受け取る側においても、人が固定化しており、新規層を取り込むことが、各自治体共通の課題となっている。その中で出た、教育委員会との連携や、子育て世代へのアプローチなどの意見は、自分だけでは出てこない新しい発見であった。

令和3年度も引き続き平和行政に携わることとなり、研修の成果を実践に移す機会を得たため、2日間で得た知見や各自治体とのネットワークを活用し、より広範囲に、より効果的な事業を展開できれば幸いである。

# 令和2年度青少年「平和と交流」支援事業 ヒロシマ平和行政実務者研修レポート

鹿児島県 鹿児島市

## 1 研修で学んだこと

### 【平和学習講座】

入市被爆者である宇佐川氏の講話を聴講した。入市被爆者とは、原爆投下日されてから2週間以内に広島市に入市した人のことである。広島市に投下された原子爆弾の特徴や被害、核兵器についての講義をいただいた。被爆者の思いを受け継ぐため、これからの人たちには発信する機会を持ってほしいという言葉が印象的であった。

### 【平和記念資料館見学】

平和記念資料館は、平成31年4月にリニューアルし、「被爆の実相」、「核兵器の危険性」、「広島歩み」のテーマごとにジオラマや写真パネル、映像、寄贈資料などをわかりやすく展示していた。展示資料の説明書は、日本語表記はもとより、英語表記もされているほか、音声ガイド（イヤホン有料貸出）による多国語の説明もあり、世界中の国々に被爆の実相を発信し、二度と戦争をしてはならないという強い意志を感じられた。写真や体験者の描いた絵と被爆資料があわせて展示されており、亡くなった方や家族の思いを被爆者の視点で伝え、自分ごととしてとらえられるように展示しているとの説明があった。

### 【被爆体験講話】

被爆体験証言者の梶本氏の講話を聴講した。梶本氏は14歳のときに爆心地から2.3km北にある工場場で被爆され、梶本氏の体験を基に高校生が描いた油絵を用いて講義をいただいた。壮絶な被爆体験や、戦後のその日の食べ物が無い暮らしについて、体験された方から直接話を聴くことはとても貴重な体験であった。終わりに、命を大切にしたい、生きていけば何とかできるので、命を粗末にしないでほしい。また、世界には多くの核兵器が存在しており、核兵器の恐ろしさは76年前の話ではなく、日本は原爆が投下されたことを忘れつつあり、核廃絶に取り組んでほしいと話され、特に印象に残った。

今回の研修では、全国から13自治体の職員が集まり、被爆の実相や平和について学んだほか、他の自治体の平和行政について知ることができた貴重な2日間となった。

## 2 その他（平和首長会議に期待すること等）

今回の研修では、全国から13自治体の職員が集まり、被爆の実相や平和について学んだほか、各自自治体の平和行政について知ることができた。また、平和首長会議の取組や被爆体験を聴くことができ、大変有意義であった。

今後とも市民一人一人の更なる平和意識の醸成を図るため、新たな事業の検討や現在の事業内容の見直しなど、平和に関する事業に研修での学びを活かしてまいりたい。